大阪商業大学学術情報リポジトリ

高校生のキャリア意識に関する大都市／地方工業都市の地域間比較

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学教職課程委員会 公開日: 2022-04-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 尾場, 友和, OBA, Tomokazu メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/1171

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

高校生のキャリア意識に関する大都市／地方工業都市の地域間比較

尾　場　友　和

1．はじめに
2．調査の概要
3．生徒の学校生活
4．生徒のキャリア意識
5．キャリア意識と諸変数の関連
6．まとめ

1．はじめに

本稿は、高校生の進路形成が地域によりどのような違いがあるのか、質問紙調査の結果から比較検討することを目的とする。

これまで高校に関する教育社会学の研究では、学校間の格差に着目した議論が蓄積されてきた。特に高校進学率が90%を越えた1970年代以降は、卒業後の進路が学校・学科によって異なることに焦点があてられ、学校の選抜配分、社会化に関心が寄せられた（藤田1980、耳塚1980、樋田ほか2000、苅谷2001など）。そこでは、高校数の増加に伴いメリトクラシーによる高校教育の輪切り構造が生じ、それぞれの学校階層で、どのような生徒がどのような過程を経て卒業していくのか、トラッキングや生徒下位文化の視点により議論された。そうした関心は、臨教審などを経て進められた高校教育の多様化・個性化にも向けられ、単位制高校や総合学科などの「新しいタイプの高校」が、メリトクラシーの中でどのように組み込まれたか、に焦点があてられた（田中1999、岡部1997、三戸2001、荒川2009など）。しかしながらこれらの研究の射程は、学校卒業後すぐの進路先であり、その後の将来展望については看過されるきらいがあった。

そうした中、バブル経済が崩壊し、フリーターやニートといった若者の雇用環境が社会問題になる。教育社会学においても、学校から職業への移行が研究テーマとして大きく取り上げられるようになった。特に、フリーターやニートなどの若者を対象とした研究では、若年無業率が全国平均よりも高かった大都市部を皮切りに、近年では疲弊した経済を抱える地方都市にも研究の視野が広がり、若者の移行研究が精力的に行われてきた。そこでは、限られた地域の労働市場の中、若者が地元のネットワークを駆使しながら生活を繋げていくキャリア形成のあり様が報告されている（新谷2002、尾川2011など）。だが一方で、若年労働者の手前の段階にある高校生のキャリア形成については、産業構造や労働市場の状況など、そこ

での社会環境に地域の特性があるにもかかわらず、学校を一括りにしてしまい、キャリア形成と地域間の差異に焦点をあてた活発な議論が十分されてこなかった。

そこで本稿は、異なる２つの地域で高校生を対象に行った質問紙調査をもとに、学校生活やキャリア意識を比較することにより、そこでの差異について検討する。具体的には、調査の概要（２節）を確認した後、生徒の学校生活（３節）、生徒のキャリア意識（４節）、キャリア意識と諸変数の関連（５節）を検討し、最後に本稿での課題（６節）を示したい。

２．調査の概要

本節では、本稿で使用する調査データを概観する。調査は、2019年に５地域16校の高校３年生を対象に行った。そのうち本稿では、産業構造や地域の生活状況が異なる大都市と地方工業都市に焦点をあて、その中でも教育課程や学校規模が類似する２校（A校、B校）を分析対象とする。この２校は、後に示すように明瞭な地域の特性がある場所に所在し、拠点校でない商業科、４クラス前後の生徒数（A校179名、B校149名）など類似点が多いことから分析の対象として選定した[1)]。なお、男女比率については、表１を参照されたい。

表１　調査校の概要（%，括弧内実数）

	男子	女子	合計
大都市A校	24.9	75.1	100.0(177)
地方工業都市B校	30.6	69.4	100.0(144)
合計	27.4	72.6	100.0(321)

次に、分析対象地域の特徴について確認する。調査対象となる大都市A校の地域は、西日本経済の中心的役割を担う大都市である。だが、近年の東京への一極集中や国際競争の激化により、地域の代表的な企業が中枢機能を東京へ、生産拠点を海外へ移転させたことにより、その地位は地盤低下傾向にあると評されている。A校は、そうした地域の市街中心部から電車で10分ほどの場所にある。

もう１つの調査校地方工業都市B校は、西日本にある県の市街地から電車で１時間くらい離れた地方都市の中心エリアに所在している。B校がある地域の発展には、かつて鉱業で栄えた企業城下町という歴史と深く関係があり、現在もそれに関連した大企業の製造部門が集積している。またB校周辺地域は、大きな病院やショッピングモールなど生活インフラが整備されそれに関連した求人も多い。そのため学校関係者の認識によれば、所在地域は県内で住みやすい地域の上位にランクインしていると言う。

1）大都市A校には商業科以外に他の学科も併設されている。だが、本稿では他地域との比較検討が目的であるため、学科の特性を統制する必要がある。したがって、今回は商業科のみのデータを使用し分析を行った。

３．生徒の学校生活

さて、ここからは分析対象となる生徒の学校生活について見ていく。まずは、学力の状況について確認する。図１～３は、中学３年時の校内成績を自己評価による回答を示している。これによると、A校B校のいずれにおいても学力上位層の生徒は少なく、A校では「中の下」が34.3%、B校では「下の方」が36.3%と最も多くなっている。学力下位層の生徒が多い学校と言える。だが、高校での学業成績を見ると、両校とも「中くらい」を中心に成績が幅広く

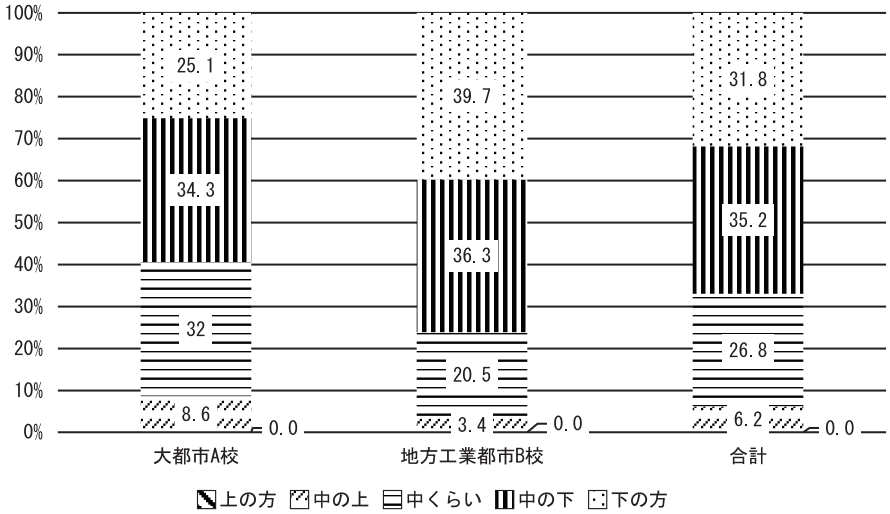

図１　自己評価による生徒の学力（中学３年時）

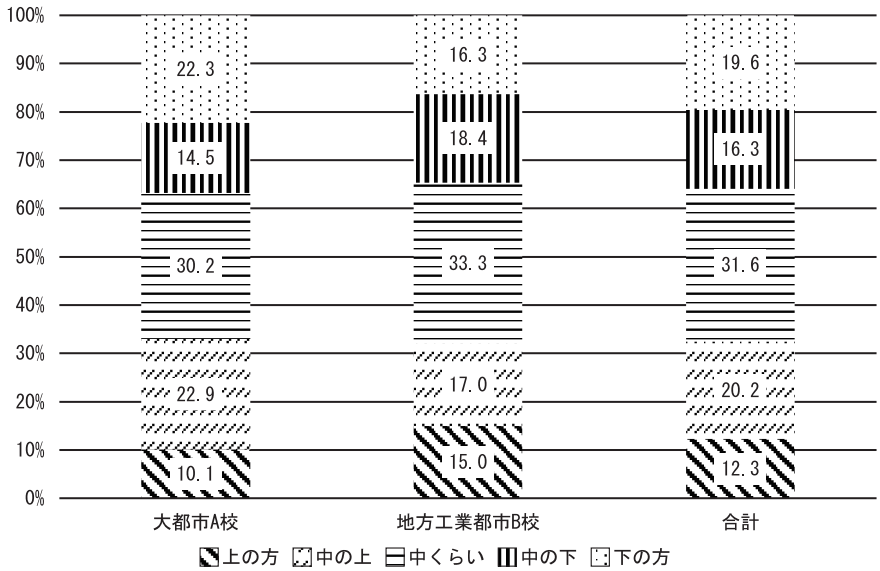

図２　自己評価による生徒の学力（高３時一般教科）

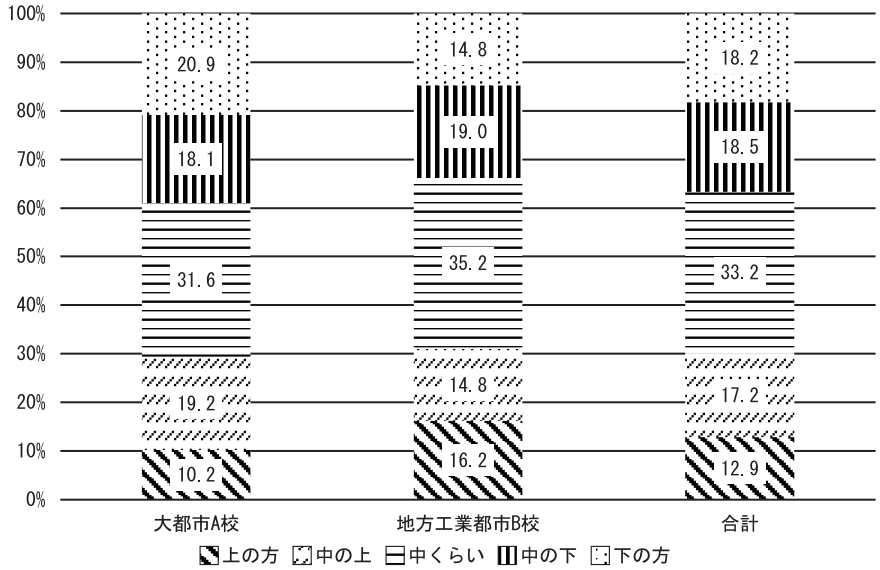

図３　自己評価による生徒の学力（高３時専門教科）

分布しており、先に見た中学３年時のような下位層への偏在は見られない。これは、高校の階層構造が生徒の学力階層と対応関係にあり、生徒の実態に応じた教育展開が各校で行われていることの証左と言える。

次に、生徒がどのような学校生活を送っているのかについて確認する。表２は、日頃の学校生活に関するそれぞれの質問に対し、「とてもあてはまる」を５、「あてはまる」を４、「どちらでもない」を３、「あてはまらない」を２、「全くあてはまらない」を１とし、その平均値を算出した結果を示している。一瞥してわかるように、A校よりもB校の方が学校生活を肯定的に受け止めており、統計学的に有意な差が算出されている。具体的には、「学校の勉強の予習・復習をよくする」「できるだけよい成績を取ろうと努力している」「資格試験や検定のためによく勉強している」「部活動をがんばっている」「学校の先生との関係は、とても良好だ」「校則はきちんと守っている」「授業中、よく私語や居眠りをしてしまう」「欠点（赤点）を取ってしまうことがある」「学校をやめたいと思うことがよくある」「友達とよくカラオケに行く」の項目である。

このようにA校では、学習や課外活動といった校内の活動への関心が低く、学校外の生活にコミットする傾向が見られる。こうした大都市A校の特徴は、A校が都心部に近く若者文化や消費文化に触れる機会が多いことと関係していると推察できる。

続いて、生徒の学校生活を構造的に確認する。表３は、表２の各項目を因子分析したものである。分析の結果、４つの因子が抽出された。

第１因子は、「文化祭や体育祭などの学校行事には積極的に参加する」「学校の先生との関係は、とても良好だ」「学校の友達との関係は、とても良好だ」「部活動をがんばっている」「学校をやめたいと思うことがよくある」から構成され、学校生活に適応し楽しく過ごすことに関する項目が多いことから【青春謳歌型】と命名した。第２因子は、「資格試験や検定のためによく勉強している」「学校の勉強の予習・復習をよくする」「できるだけよい成績を取ろ

表２　生徒の学校生活の地域間比較

	大都市 A校	地方工業 都市B校	
学校の勉強の予習・復習をよくする	2.01	2.53	***
できるだけよい成績を取ろうと努力している	3.27	3.71	***
資格試験や検定のためによく勉強している	2.97	3.58	***
部活動をがんばっている	2.37	3.40	***
文化祭や体育祭などの学校行事には積極的に参加する	3.49	3.71	
学校の先生との関係は、とても良好だ	3.36	3.77	***
学校の友達との関係は、とても良好だ	4.02	4.09	
校則はきちんと守っている	3.81	4.37	***
授業中、よく私語や居眠りをしてしまう	3.47	2.86	***
欠点（赤点）を取ってしまうことがある	3.01	2.21	***
学校をやめたいと思うことがよくある	3.20	2.87	*
学校外では、小・中学校時代の友達や先輩と遊ぶ	3.49	3.46	
家ではずっとスマホを使っている	3.97	3.79	
友達とよくカラオケに行く	3.39	2.90	***
いつもオシャレに気をつかっている	3.43	3.43	

注　カイ二乗検定の結果、*は５％以下、**は１％以下、***は0.1%以下を示す。以下同様。

表３　生徒の学校生活に関する因子分析の結果

	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子
文化祭や体育祭などの学校行事には積極的に参加する	0.775	-0.070	0.011	0.144
学校の先生との関係は、とても良好だ	0.696	0.071	0.052	-0.091
学校の友達との関係は、とても良好だ	0.599	-0.039	0.104	0.054
部活動をがんばっている	0.412	0.117	-0.174	-0.036
学校をやめたいと思うことがよくある	-0.376	0.196	0.119	0.349
校則はきちんと守っている	0.348	0.276	-0.069	-0.067
資格試験や検定のためによく勉強している	-0.036	0.750	0.089	-0.164
学校の勉強の予習・復習をよくする	-0.028	0.735	-0.160	0.217
できるだけよい成績を取ろうと努力している	0.029	0.701	0.078	-0.113
友達とよくカラオケに行く	-0.054	-0.055	0.673	-0.003
いつもオシャレに気をつかっている	0.126	0.113	0.629	0.094
家ではずっとスマホを使っている	-0.066	-0.129	0.510	-0.089
欠点（赤点）を取ってしまうことがある	0.007	-0.018	-0.076	0.736
授業中、よく私語や居眠りをしてしまう	0.075	-0.180	0.108	0.439
学校外では、小・中学校時代の友達や先輩と遊ぶ	0.115	0.108	0.194	0.249
回転後の負荷平方和	2.358	2.477	1.445	1.821

注　因子抽出法：主因子法、回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

うと努力している」から構成され、学習に対し熱心に取り組むことに関する項目が多いことから【勉強熱心型】と命名した。第３因子は、「友達とよくカラオケに行く」「いつもオシャ

レに気をつかっている」「家ではずっとスマホを使っている」から構成され、学校外の若者の遊びや消費文化に関する項目が多いことから【消費文化型】と命名した。第４因子は、「欠点（赤点）を取ってしまうことがある」「授業中、よく私語や居眠りをしてしまう」から構成され、学校で求められる規範からの逸脱に関する項目が多いことから【学校逸脱型】と命名した。

これら各因子間の相関は、いずれも強い関連性は認められなかったが、各因子得点を学校間で比較すると0.1%水準で有意差があり、【青春謳歌型】、【勉強熱心型】では地方工業都市B校のポイントが高く、【消費文化型】、【学校逸脱型】では大都市A校のポイントが高くなっていた（表４・５）。こうした大都市よりも地方都市の生徒の方が向学校的な意識を示す傾向は、筆者らが10年ほど前に実施した調査と同様であった（尾川・尾場・山田2012）。

表４　生徒の学校生活に関する因子相関行列

	青春謳歌型	勉強熱心型	消費文化型	学校逸脱型
青春謳歌型	—			
勉強熱心型	0.422	—		
消費文化型	0.061	-0.048	—	
学校逸脱型	-0.244	-0.460	0.347	—

表５　生徒の学校生活に関する因子の地域間比較

	大都市A校	地方工業都市B校	
青春謳歌型	-0.197	0.247	***
勉強熱心型	-0.274	0.344	***
消費文化型	0.118	-0.148	***
学校逸脱型	0.258	-0.324	***

４．生徒のキャリア意識

次に、生徒の将来の生き方・働き方に対する認識について見ていく。まずは、生徒の進路希望を確認する。図４・５は、高校入学時と現在（高３時）の進路希望を示している。いずれの学校においても、入学時に就職を希望する生徒が約半数を占め、その割合は学年進行により増加している。また、入学時に将来を見通せていなかった「考えていない」に回答する生徒は、入学段階においてA校が24.9%、B校が11.6%であったが、高３時ではA校が5.7%、B校が2.1%のようにその割合は減少している。このように、進路指導やキャリア教育をはじめとするさまざまな生活経験を通じて、生徒は自らのキャリアについて考え、それが時を経て具体化していくことがわかる。

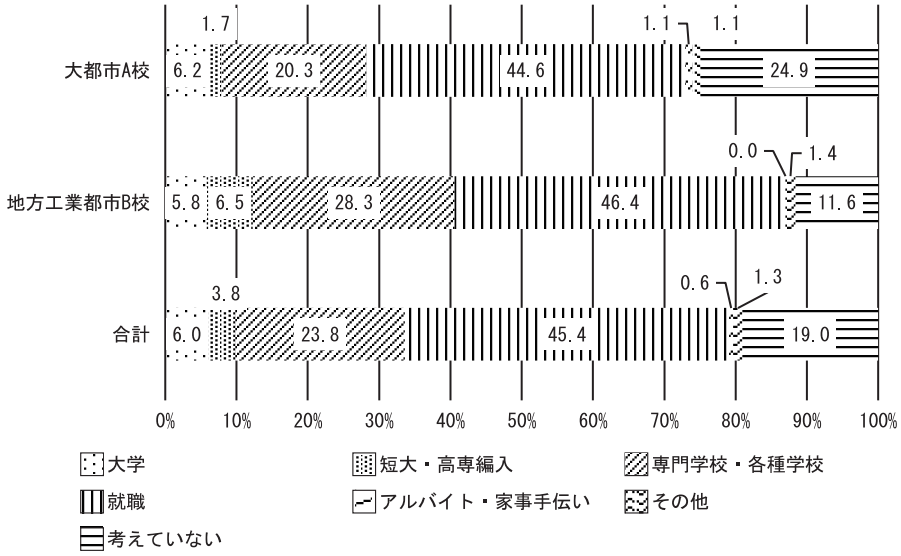

図４　生徒の進路希望（入学時）

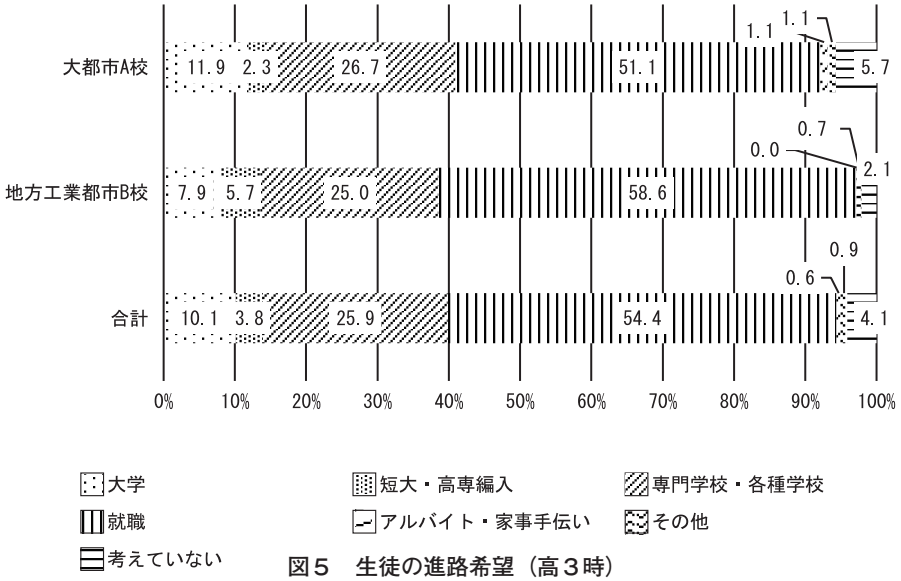

図５　生徒の進路希望（高３時）

では、生徒のキャリア意識はどのようになっているのだろうか。表６は、表２と同様に生徒の回答を数値化しその平均値をまとめたものである。これによると、全体的にB校の方が職業選択を取り巻く社会状況に対し切迫感が強く、現実的な進路を検討しているようである（例えば、「仕事をやめても、またすぐに見つけられる」「定職につかなくても暮らしていける」「今を楽しむより、将来のことを考えるほうが重要視だ」「好きなことでないと、仕事は続けられない」など）。また、学歴に対する意識では、B校よりもA校の方が高い意識を持っていた。

表６　生徒のキャリア意識の地域間比較

	大都市 A校	地方工業 都市B校	
仕事をやめても、またすぐに見つけられる	2.74	2.52	*
定職につかなくても暮らしていける	2.55	2.30	*
今を楽しむより、将来のことを考えるほうが重要視だ	3.18	3.40	*
好きなことでないと、仕事は続けられない	3.63	3.39	*
職場の人間関係がよくないと仕事は続けられない	4.22	4.14	
給料がよくないと仕事は続けられない	3.54	3.59	
地元には、限られた種類の仕事しかない	2.97	3.19	*
高校卒より、大学卒・短大卒の方が仕事に有利だ	3.93	3.41	***
仕事では、知識・技術より、人間関係をつくる力のほうが重要だ	3.57	3.46	
仕事や生活で困ったとき､地元の友達･知人が助けてくれると思う	3.39	3.48	
仕事や生活がうまくいかないのは、自分の努力が足りないからだ	3.66	3.69	
収入が低ければ幸せになれない	2.96	2.95	

こうした生徒の認識は、学校の所在地域の産業構成やそこで働く人の学歴との関連が考えられる。図６は､産業別従事者の割合を地域ごとにまとめている。それによるA校の地域では、第３次産業が82.9%であるのに対し、B校の地域では71.6%と10ポイントほど低くなっている。こうした大都市における産業の多様性は、生徒のキャリア展望に迷いを生じさせ、現実感を遠ざけてしまう可能性がある。また、国勢調査（2010年）による大卒以上の学歴を有する人口（30-59歳）の割合では、A校の地域の方が大卒以上の学歴を持つ割合がB校の地域よりも５ポイント高い。それゆえ、身近に大卒学歴を持つ大人のキャリアに触れる機会が高いことが考えられ、そのことが生徒のキャリア意識に反映している可能性がある。これらの解釈はまだ推測の域を出ない。今後の課題としたい。

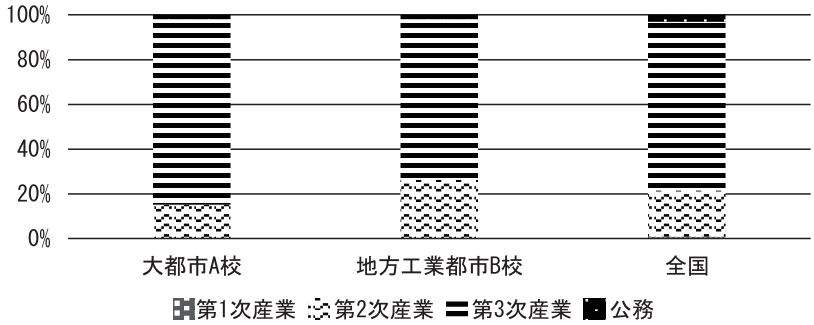

図６　産業別従業者の割合に関する地域比較

出所：「平成26年経済センサス - 基礎調査」より作成

以上の結果をもとに、キャリア意識についても表３と同様、その構造について確認する。表７は、表６の各項目を因子分析したものである。分析の結果、５つの因子が抽出され、因子負荷量0.35以上で検討した結果、第４因子までを採用した。

表７　生徒のキャリア意識に関する因子分析の結果

	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子	第５因子
収入が低ければ幸せになれない	0.741	-0.110	-0.153	-0.004	0.148
給料がよくないと仕事は続けられない	0.576	0.050	0.170	0.037	-0.125
地元には、限られた種類の仕事しかない	0.312	0.123	0.042	-0.039	0.210
定職につかなくても暮らしていける	-0.022	0.723	0.068	-0.094	0.028
仕事をやめても、またすぐに見つけられる	-0.026	0.632	-0.052	0.097	0.078
職場の人間関係がよくないと仕事は続けられない	-0.044	-0.085	0.712	0.089	-0.017
好きなことでないと、仕事は続けられない	-0.018	0.108	0.582	-0.08	0.068
仕事では、知識・技術より、人間関係をつくる力のほうが重要だ	-0.110	-0.092	0.086	0.579	0.210
仕事や生活で困ったとき、地元の友達・知人が助けてくれると思う	0.002	0.190	-0.137	0.561	-0.158
仕事や生活がうまくいかないのは、自分の努力が足りないからだ	0.094	-0.061	0.029	0.359	0.069
高校卒より、大学卒・短大卒の方が仕事に有利だ	0.154	0.083	0.048	0.077	0.559
今を楽しむより、将来のことを考えるほうが重要視だ	0.146	-0.024	0.121	0.190	-0.205
回転後の負荷平方和	1.467	1.212	1.435	1.177	0.699

注　因子抽出法：主因子法回転法：Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

第１因子は、「収入が低ければ幸せになれない」「給料がよくないと仕事は続けられない」から構成され、収入とキャリアの充実を関連して捉える項目が多いことから【収入重視】と命名した。第２因子は、「定職につかなくても暮らしていける」「仕事をやめても、またすぐに見つけられる」から構成され、仕事に対し楽観的に考える項目が多いことから【成り行き重視】と命名した。第３因子は、「職場の人間関係がよくないと仕事は続けられない」「好きなことでないと、仕事は続けられない」から構成され、仕事内容や人間関係など仕事の条件を重視する項目が多いことから【条件重視】と命名した。第４因子は、「仕事では、知識・技術より、人間関係をつくる力のほうが重要だ」「仕事や生活で困ったとき、地元の友達・知人が助けてくれると思う」「仕事や生活がうまくいかないのは、自分の努力が足りないからだ」から構成され、仕事を進める上での困難を本人や他者との人間関係を重視する項目が多いことから【人間関係志向】と命名した。

これら各因子間の相関は、いずれも強い関連性は認められなかった（表８）。だが、各因子得点を学校間で比較すると【人間関係志向】でB校の相関係数が高くなっていた（表９）。B校の地域における人々の生活は、比較的限られたエリアで行われるため、常に知り合いに囲まれて生活している可能性がある。それゆえ人的ネットワークがキャリアに響きやすく、そのネットワークの構築は個人に帰されると考えられているのではないだろうか。さらに精

表８　生徒のキャリア意識に関する因子相関行列

	収入重視	成り行き重視	仕事条件重視	人間関係重視
収入重視	—			
成り行き重視	0.277	—		
仕事条件重視	0.453	0.201	—	
人間関係重視	0.293	0.243	0.398	—

表９　生徒のキャリア意識に関する因子の地域間比較

	大都市A校	地方工業都市B校	
収入重視	-0.043	0.052	
成り行き重視	0.072	-0.088	
仕事条件重視	0.024	-0.029	
人間関係重視	-0.111	0.135	**

査してその要因を追究する必要がある。

５．キャリア意識と諸変数の関連

本節では、生徒の学校生活（３節）のデータに地元意識に関する調査結果（表10）を加え、それらがキャリア意識とどのように関連しているのかについて検討する。

表11・12はキャリア因子と学校生活や地元意識などの諸変数との関連を地域別に示している。ここでは、解釈をよりわかり易くするため、１%水準で有意であった項目に着目する。まず、両地域で共通して関連があった項目について確認する。

表10　生徒の地元意識に関する地域間比較

	大都市A校	地方工業都市B校	
ずっと地元で暮らしたい	2.96	3.08	
現在の友達と、将来もいつも付き合っていたい	4.28	4.33	
将来、地元の行事（祭りなど）には毎年参加したい	3.16	3.61	***
親保護者と同じような暮らしぶりがよいをしたい	3.04	3.07	
地元の大人(近隣住民)と同じような暮らしぶりがよいをしたい	2.77	2.84	
地元の大人(近隣住民)とひと と同じような仕事や働き方をしたい	2.68	2.72	

表11　大都市A校のキャリア因子と諸変数との相関

	収入重視	成り行き重視	仕事条件重視	人間関係重視
高３時一般教科の成績	0.003	0.023	0.087	0.131
高３時専門教科の成績	0.033	0.081	0.174 *	0.128
青春謳歌型	0.299 **	0.201 **	0.349 **	0.195 *
勉強熱心型	0.273 **	0.116	0.237 **	0.169 *
消費文化型	0.115	0.098	0.211 **	0.160 *
学校逸脱型	0.058	0.074	0.004	-0.077
地元意識	0.129	0.091	0.339 **	0.152 *

２）表12は地元に関する項目への生徒の意識の程度を示している。これによれば、「将来、地元の行事（祭りなど）には毎年参加したい」の項目で地方工業都市B校のポイントが高く有意差がある。他の項目では有意差は出ていないが、どの項目でも地方工業都市B校の数値が大都市A校よりも高くなっている。なお本節では、各項目の値の合計を合成変数として使用している（α=0.770）。

表12　地方工業都市B校のキャリア因子と諸変数との相関

	収入重視	成り行き重視	仕事条件重視	人間関係重視
高３時一般教科の成績	0.015	-0.018	0.160	0.185 *
高３時専門教科の成績	0.011	0.063	0.124	0.134
青春謳歌型	0.377 **	0.190 *	0.299 **	0.289 **
勉強熱心型	0.213 *	0.052	0.312 **	0.351 **
消費文化型	0.359 **	0.299 **	0.161	0.044
学校逸脱型	0.136	0.123	-0.171 *	-0.148
地元意識の合成変数	0.341 **	0.186 *	0.243 **	0.162

【収入重視】では、学校生活の【青春謳歌型】と関連があり、加えてA校では【勉強熱心型】、B校では「消費文化型」「地元意識」との関連が見られた。それゆえA校では、将来の仕事の経済的側面が学校への適応度と関連性が高いが、B校では全体的に収入に対する関心が高く、地元への親和性が生活にかかる金銭感覚と結びついていると考えられる。

【成り行き重視】では、A校では学校生活の【青春謳歌型】、B校では【消費文化型】と関連があり、A校では学校生活への適応度の高さが計画的なキャリア設計を遠ざけると考えられる。一方、B校では【消費文化型】と関連があり、学校外の生活へのコミットメントが、楽観的なキャリア観を導く可能性があると言える。

【仕事条件重視】では、学校生活の【青春謳歌型】【勉強熱心型】及び【地元意識】の因子が両地域で相関があり、学校への適応度の高さに加え身近な地元の社会への関心が、職業についてからの現実的な場面の想像と結びついていると考えられる。地域別に視点を移すと、A校の【消費文化型】において関連が見られた。それゆえ、学校外の生活スタイルと働く条件との適合性の視点からキャリア展望していることが推察される。

【人間関係重視】では、B校で学校生活の【青春謳歌型】【勉強熱心型】と相関があり、学校の集団生活へのコミットメントの高さが、社会に出てからの人付き合いや信頼関係といったチームでの取り組み、及び責任を担うことに対する心構えと結びついていると考えられる。

以上の結果から注目したいのは、【消費文化型】のライフスタイルとキャリア意識との関連が地域により異なる点である。すなわち、【消費文化志向】の生徒は、大都市A校では働く条件を重視する傾向があるのに対し、地方工業都市B校では何とかなるといった楽観的な意識と収入を重視するといった現実的な意識が共存する傾向が見られた。こうした地域による認識の違いを読み解く手がかりとして、世帯あたりの所得データがある。「平成26年全国消費実態調査」によれば、１世帯当たりの年間収入額は地方工業都市B校の地域の方が大都市A校の地域よりも10万円ほど高い。さらに、地方工業都市B校の地域は、企業城下町であるがゆえに学校外の生活は地域の産業事情と地続きである。そうしたB校地域の人文地理学的特性が、生徒のキャリア意識に影響を与えているという１つの解釈が成立するのではないだろうか。

６．まとめ

以上、高校生調査の結果から、２地点の生徒の学校生活・キャリア意識等を分析し、その差異について検討を進めてきた。これまでの結果をまとめると、次のようになる。

第１に、同じ学科、学力層の高校であっても、地域によって高校生のライフスタイルが異なるという点である。大都市A校の生徒の認識では、通常の教育活動で行われる授業や資格取得の学習だけでなく、文化祭などの学校行事や部活動といった学習以外の活動においても、積極的な関わりの度合いが低くなっていた。こうした学校に対する消極的な意識は、地方工業都市B校と異なる結果になった。一方、学校外の生活に繋がる消費文化においては、大都市A校の生徒の方が親和性の度合いが高い。それゆえ大都市の若者を対象とした消費文化は、学校により提供される高校生の生活を侵食し、地域の社会的な環境が高校生活の規定要因となる可能性がある。

第２に、地域の違いはキャリア意識にも関連する点である。地方工業都市B校では、将来の進路に対する切迫感が強く、職業生活を安易に考えない傾向が見られた。この背景には、大都市A校の地域と比較し、第２次産業に従事する大人が多く仕事の種類が多様でない。そのため、キャリアの展望が見えやすいということが考えられる。また、B校にはキャリア形成に関して人との繋がりを重視する生徒が多く、日常的に人との関係性が見えやすい状況にあると考えられる。こうした生活環境の違いは、将来のキャリアに対する認識に影響を与えていると言える。

第３に、消費文化への傾倒とキャリア意識の関連の仕方は、地域によって異なる点である。すなわち、消費文化志向の生徒は、大都市A校では働く条件を重視する傾向があるのに対し、地方工業都市B校では何とかなるといった楽観的な意識と収入を重視するといった現実的な認識が、共存する傾向が見られた。こうした地域による認識の違いは、地域の人文地理学的な特性との関連が考えられ、今後さらなる究明が求められる。

こうした結果は、同じような教育課程・学力層の生徒であっても、生活する地域の特性により学校生活、キャリアに影響を及ぼす可能性を明示しており、地域の特性を看過した高校生研究の限界を示唆できたと言えるだろう。特に、キャリア意識に関しては、地域の産業構造や労働市場と関係が深い。本稿は、そうした地域別に分析を試みようとする今後の研究に対し、布石を投じることができたと言えよう。一方で、分析対象となった各地域1校ずつという限られたサンプルであるため解釈に限界があることや、大都市／地方工業都市のような人口規模や産業構造以外にも地域特性を示す変数を扱っていないなど、問題点もある。稿を改め、今後の課題としたい。

付記

本研究はJSPS 科研費18K02428（基盤研究(C)/研究代表 尾場友和）による。

《参考文献》

阿部真大，2013,『地方にこもる若者たち:都会と田舎の間に出現した新しい社会』朝日新聞出版。

荒川葉，2009，『「夢追い」型進路形成の功罪：高校改革の社会学』東信堂。

新谷周平, 2002,「ストリートダンスからフリーターへ:進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』第71集，pp.151-170.

藤田英典，1980,「進路選択のメカニズム」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』有斐閣, pp.105-129.

樋田大二郎ほか編，2000，『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。

朴澤泰男，2015，『高等教育機会の地域格差－地方における高校生の大学進学行動』東信堂。

耳塚寛明，1980，「生徒文化の分化に関する研究」『教育社会学研究』35，pp.111-122.

三戸親子，2001，「総合学科における生徒の進路意識形成」『教育社会学研究』第69集，pp.103-123.

尾川満宏，2011，「地方の若者による労働世界の再構築：ローカルな社会状況の変容と労働経験の相互連関」『教育社会学研究』第88集，pp.251-271.

尾川満宏・尾場友和・山田浩之, 2011,「現代高校生の生活と進路意識:ある地方商業高校を事例として」『教育学研究紀要』第57巻，pp.493-504.

岡部善平，1997，「『総合学科』高校生の科目選択過程に関する事例研究：選択制カリキュラムへの社会学的アプローチ」『教育社会学研究』第61集，pp.143-162.

田中葉, 1999,「『総合選択制高校』科目選択制の変容過程に関する実証的研究:自由な科目選択の幻想」『教育社会学研究』第64集，pp.143-163.